

キャンプ・マックネア周辺における遊興地の成立と地域社会
—山梨県南都留郡中野村山中地区を事例として—

神田 孝治

研究ノート

キャンプ・マックネア周辺における遊興地の成立と地域社会

—山梨県南都留郡中野村山中地区を事例として—

**Development of a Red-light District and the Local Community:
A Case Study of Yamanaka District Located on the Fringe of Mt.Fuji in Japan**

神田 孝治

Koji Kanda

和歌山大学観光学部

キーワード：遊興地、観光、まなざし、米軍基地、山中地区

Key Words : Red-light District, Tourism, Gaze, US Military Base, Yamanaka District

Abstract :

This paper examines the development of a red light district and its influence on local community through an example of Yamanaka District located on the fringe of Mt. Fuji in Japan. A particular focus is given to the outsiders' gazes and the emotions of the local residents.

I. はじめに

美しい富士のすそのに
ほくたちの山中はある
昔は日本のだいたいな観光地だった

今は米軍のだいたいな演習地だ
昼は大砲の音、飛行機の爆音、戦車の音がひびき
すぐそばで戦争をやっているようだ

夜は米軍の兵隊とパンパンとレコードがさわぎ
米軍の村になったようだ

冒頭の文章は、山梨県中野村山中小学校六年生が書いたものである。これは1953年4月に発行された『基地の子—この事実をどう考えたら良いか—』(宮原誠一・上田庄三郎編著、光文社発行)に掲載されたもので¹⁾、同年4月8日の雑誌『アサヒグラフ』掲載の「富士演習地界限」(pp.6-7)と題された記事でも、最初に取り上げられたものである。富士山麓の観光地であった山中湖畔が、「夜は米軍の兵隊とパンパンとレコードがさわぎ」、「米軍の村になったようだ」と地元の小学生に言われるような状況になっていることが、雑誌メディアでも注目されていたのである。

ここで言及されるような事態になったのは、戦前期に陸軍が設置した富士山麓山中湖近くの北富士演習場に米軍が進駐したことによる。キャンプ・マックネアと呼ばれたこの地の

影響で、その近郊には米軍向けの遊興地が形成されるようになったのである。本稿では、そうした地域の中でも特に中心的な役割を果たした山梨県中野村山中地区に注目し、米軍向けの遊興地の成立過程とその地域社会への影響について考察したい。

本稿における検討を行うにあたり、特に参考になるのが吉田による奈良RRセンターに関する研究である²⁾。吉田は、「日本らしさ」を喚起できる観光地であった奈良に、朝鮮戦争帰休兵の休養・回復施設として1952年5月に設置された奈良RRセンターに注目し、その周辺に出現した歓楽街が地域社会に与えた影響について多面的に考察している。その際に、駐留兵や帰休兵といった外国人相手の接客婦である「パンパン」や彼女たちの顧客に向けられたまなざしを明らかにし、そこから彼/彼女らの存在が地域社会や観光地としての奈良にどのような影響を及ぼしたのか、そして地域住民と同時に奈良市および奈良県、さらには日本政府がどのようにそれを受け止め対処したのかを検討していく。こうした方法は、特にアイデンティティに関わる政治的問題を考える際に有効であるため、類似したテーマを取り扱う本稿でも、関係する様々なまなざしに注目して考察することにする。特に本稿では、パンパンや米兵ばかりでなく、当該地域社会に向けられた外部からのまなざしに焦点をあてるなかで検討を行うことにしたい。

II. キャンプ・マックネアの存在による遊興地の成立と山中地区の変容

富士山麓に向かう列車の車窓に、夏の日射しが明るかった。それぞれに一人旅の青年と少女が向かい合って席を占めていた。……二人は眸を輝かせて、湖畔の夏のスバラしさを語り続けるのである。

「落葉松の林を霧が包んで、ウグイスが鳴くのね。朝が好き」

「夕方になると、湖の岸を小さな鳥がチチチチって飛びますね」

「そう、砂の上に可愛い足跡がついてますわ」

「ステキだなあ」

「ステキだわ」

「ボクは、湖の少し上に小さな別荘があるんです」

「まあ、いいわね。ゴルフ場の近くですか?」

そうだ。かつての佳き時代、記者も一夏を岳麓湖畔に過ごしたことがあった。そして、今二人と隣り合って行く先も、やはり彼らと同じ湖畔なのだ。

……湖は依然ウルトラマリンに陽をたたえ、大気は爽やかに澄んでいた。が……しかし……山麓には悪夢のようなあの轟音が響いていた。爆弾の落下音。実弾の砲音。そして、静かに眠っていた湖沿いの町を、すさまじい砂煙を巻き上げながら、カーキー色のジープやトラックが猛烈な勢で疾駆していた。いや、それよりも、街道に面した寒村の変貌ぶりはどうだ。軒並み原色の看板を掲げたビヤホール、スーベニア・ショップ、洗濯屋……。純朴な農夫の代りに、街は兵士と淫売婦人で満ち満ちていたのだ。(『毎日グラフ』1952年8月1日)

本稿冒頭の文章と同じように、ここでも観光地であった山中地区が米軍演習の影響下に置かれ、とりわけ米兵相手の遊興地へと転換したことが語られており、これが当地の代表的な変化として比較的広く認識されていたことが伺われる。こうした変化についてはその他にも、「中野村一帯は、中央に六六〇町歩の山中湖を抱く著名な観光地」であったが、「嘗ての『静かな観光地山中湖』は『歓楽の巷』『砲煙弾雨の村』と化しつつある」ことを論じる記述³⁾などを見出すことができる。以下に、このような観光地から遊興地への山中地区の変容過程と、そうした変化に対する外部からのまなざしについて簡単にまとめることにしたい。

戦前期における山中湖畔の観光地化は、1916年に富士北麓地域の開発が提唱されたことをきっかけにはじまった。特に富士山麓電気鉄道株式会社の関連会社である富士山麓土地株式会社によって別荘地開発が行われ、山中湖の南側には1932年に徳富蘇峰が「旭日丘」と命名した高原別荘地が創り出されていた。そして山中地区は、旭ヶ丘別荘地の対岸に位置する湖畔の避暑地、遊覧観光地となっていく⁴⁾。この地区は、田畑を女性が耕作し、男性は山へ入ったり、県外へ出稼ぎに行ったりすることが多い地域であった。高度が

高く冷害の影響を受け、土地がやせている上、水田が少なかったからである⁵⁾。戦前期の山中地区は、あまり豊かではない集落ではあったが、観光地化が進行しつつある状況だったのである。

当地区近くの梨ヶ原を含む一帯は、1936年11月に日本陸軍が開設した北富士演習場が存在した地域であった。この地は、1945年の11月に米軍に接収され、キャンプ・マックネアと呼ばれるようになる。1947年頃から演習が始められ、地元住民の同地への立ち入りは原則として日曜日を除き禁止された。また、演習場内既耕作地での耕作も、1938年10月に山梨軍政部から一部を除き禁じられた。その結果、採木・製炭・馬糧の採取が出来なくなった地元農民は、大きな経済的打撃を受けることになった。そして当地への米軍の駐屯は、1956年3月15日に、第12海兵連隊の大部分が沖縄に、一部がキャンプ富士演習場に引き揚げて終了することとなる⁶⁾。

上述の米軍を対象とした山中地区における遊興地形成の過程について、「保健所の立場から見た夜の女の実態」(1952年8月26日発行)⁷⁾を参考に簡単にまとめてみたい。まず1946年から1948年の段階では、富士吉田市の花柳界から当番制でキャンプ・マックネアまで女性の現地出張サービスが行われていた。特に1948年に約700名の進駐軍が同地に駐留すると、その業態が繁栄しはじめた。そして、1949年には山中地区一帯に熱海、横浜、東京、神奈川から業者が女性を連れて進出してきた。しかしながら、「警察署とMPの取締りが厳重だつた為にパンパンは中野村の山中にのがれていた。そして兵隊をキャッチしてはあからさまな野外戦が行われたのである。又ある者は土地の野良衣をまとい鎌をかついで百姓をよそほひ山に兵隊をさそい込み売淫をなしていた。その為善良な本物の百姓の婦人が間違えられて被害を被つた事件も起きて来た。兵隊は性的欲望を満足させる為に中野村内の婦女子を強姦した。このため中野村の一部では婦女子を防禦するため馬小屋を改造しパンパンをおき裏口営業をするという状態になる。他の記事でも、「特に地元の婦女子で危害を受けるものも現れ、一般住民特に婦女子の不安が甚しく、婦女子は野外作業にも出られず、農民は日暮と共に戸を閉して不安におののき、消防団員がこれらの警戒に当る等、岳麓一帯は経済上・治安上重大な危機に直面するに至つた。」⁸⁾とあり、米兵による性暴力の存在が当地にパンパンを置く方向へと導いたことがわかる。

そして「1950年6月入麓の米軍については隊長が独自の立場で保健所及開業医の検診を受けた無病者の婦女子に対しては米将兵との交渉を黙認するの挙に出たので、各業者はこおどりして喜び兵隊を吸収した吉田中の各とおりにはパンパンと兵隊のアベック姿は公然とした見世物」になる。その後、取り締まりの強化もなされたが長くは続かず、次第に遊興地は拡大していくことになる。1951年の状況については、「この頃山中地区は農耕を以てしては生活が不可能となり飲

食業へ転業する者が増えて来た。接客施設の新築ににぎわいビヤホールの設備が軌道に乗ってきた。……村民は耕地山林をとられ収入の道を失ひまた演習兵がBeerを要求し又女を要求し、女がいない場合村の婦女子が暴行されるのだ。事実数十名が被害をうけたと云はれる。」ことが指摘されている。また先に取り上げた他の記事でも、「米軍の入麓により生活の脅威を感じたが、漸次住宅を開放し、これによる現金収入を得る方途を講ずるに至り、その収入は部屋一ヶ月一畳約一、〇〇〇円当、六畳一室五、〇〇〇円は安い方で、多くは一家にして数室を解放し、一ヶ月二、三万円の収入を得ているものもあるとの風評あり⁹⁾」と論じている。演習場の存在で経済的に困窮した農民を中心に、地域の女性を守ることも意図し、遊興地の経営に乗り出していったのである。こうした当時の状況については、1951年9月7日発行の『朝日新聞山梨版』が、国警県本部が同月6日に発表したデータを用いて以下のように報じている。

南都留郡中野村山中は約二百三十名（土、日は約三十名増）……何れも東京、神奈川、北海道、千葉、群馬、広島、大阪、山梨各地の流れもので職業的経験者ばかり。両親のないもの、家庭不和のもの、虚栄心の強いものが大部分で、まれには子弟の教育費かせぎというも見受けられる。また現在のところ人身売買の被害者は見当たらない。彼女らの収入は月収最低二万円から最高七万円、平均五万円となっている。彼女らの宿泊は月額最低五千円から最高八千円までで平均六千円、一軒の農家で三人の夜の女に部屋貸ししていると、家主の収入は最低一万五千円となる。その他家主と折半または四分六の割りに分ける方法、そのほかかせぎのない日は食費だけを出す契約などがある。

このように米兵向けの遊興地になった山中地区について、「この部落では、ここ一、二年で旅館が二軒廃業した。立ち行かない理由は、周囲の喧噪に恐れをなして日本人客が泊まらぬ」状態になったことが記されている¹⁰⁾。山中地区は、米兵向け遊興地となったことで、観光地としての機能を喪失していき、それまでと異なる位置づけの場所になっていったのである。

また、以上のような遊興地形成の結果、当地の景観も大きく変容していた。本章の最初の引用で、「軒並み原色の看板を掲げたビヤホール、スーベニヤ・ショップ、洗濯屋……。純朴な農夫の代りに、街は兵士と淫売婦人で満ち満ちていたのだ。」という文章があるが、こうした描写は当時の山中地区を描いたもので頻繁になされていた。外部からのまなざしは、特に異質な遊興地としての状況に向けられるようになっていたのである。こうしたまなざしは、例えば1954年に記された以下のルポルタージュに明瞭に見て取ることができる。

山中湖入口停留所で下車する。『赤線基地』と呼ばれる問題の中野村山中部落である。

走りすぎるバスに向つて英語で呼びかける女があり、目の前を燃えるような真紅のワンピース、紺・緑と原色のスカート・ズボンに厚化粧した派手な服装の女の群が、狭い道路を一杯に右往左往しているのが目をひき、道路の両側は古風の草屋の片側にどぎついペンキ塗・洋館風の建物を造り付けたビヤホールなどの特飲店が軒を並べ、看板は『メリー』『ドンゴラ』など、目につくものは粹な横文字ばかりで、西部劇に出てくる西部の街同然の異国情緒で、外来者の受ける刺戟は目に強い¹¹⁾。

Ⅲ. 山中地区の遊興地と地域社会への外部からのまなざし

1. 遊興地の悪影響に対する外部からのまなざし

前節で取り上げた1954年のルポルタージュに「『赤線基地』と呼ばれる問題の中野村山中部落である。」と記されているように、山中地区は全国的にも注目を集める場所になっていた。その理由としては、1951年12月に発行された『教育評論』に、売春問題に取り組む神崎清が「山中部落の子供を救え」という論考を発表したように、遊興地による教育への影響問題があった¹²⁾。彼は、自身の視察を元にした、「部落全体が春の宿、教室に流込むジャズ音楽」（『朝日新聞山梨版』1951年8月10日）や「パンパン白書 岳麓の実態」（『山梨時事新聞』1951年8月17日）といった記事が大きな反響を呼び、その圧力が県や村の当局者に何らかの対策を求めることに追い込んだとしている。

このうち後者の記事の冒頭は、以下のような内容である。

エキゾチックな夢見る瞳をした幼児を連れて流れる夜の女もある北は青森、岩手、北海道、南は九州の県まで全国女絵図を織りなす富士山麓、吉田、山中湖畔は錦帯橋で有名な山口県岩国市とともに全国で二つの特殊な存在として注視を浴びているパンパンブームに、どうにもならぬ経済的欲求から大人の世界は漸次摩ひしてゆくが、熱心な子供達は何を考えているだろうか、校庭のさくにもたれて客を待つ女、土曜、日曜は道路も通れぬほど群がつて遊び場もない子供達山中小学校のいい子達は、この女達に限りない憤りのまなこを向けて居る。そして次のように綴方を書いている。

【小学校六年生A】早く静かな村にしたいものです。六年生の太郎さんは〇〇の仕事をしているのを見つけ、小さい子に教えて皆に見ゆきました。四年生の女の子で爪を赤く（マニキュア）している者があります。

【小学校六年生B】学校のそばで毎日トンコ節や賑やかなレコードを一日中かけられては、とても勉強が出来ません。どうして大人は酒や女にばかり戯れているのでしょうか。

このように、地元の小学生による山中地区の遊興地への批判の声を取り上げた後、神崎は続けて以下のように指摘している。

調査結果は全く驚くべきもので児童憲章の立場からも放任してはおかれない。山中の例を見ても二百五十戸の四十%以上、百余戸に女が巣食っており、三百名を突破している。

岳麓を流れる夜の女は千名を越えると推定される。……驚くべき事実は学校教育の一端を担う地元南都留PTA連合会の某幹部が、この組合の幹部になつて居ることで、どう考えても何れかを辞めて貰う必要がある。山中では村長がやることだからと村議、学校の先生まで部屋貸しをして全く軒並に夜の女の宿になつている。……関係官署がソツポを向いている中で、先生は並々ならぬ努力を続け、夏休みの単位講習も交代で出る有様。山中小学校の日曜日は全国の日曜日と違い月曜日となつており、六日制を実施、夏休みに入つてからは部落の子供クラブ活動を指導、土曜、日曜は何とか名目つけて登校させ図書や健全な遊具を与え、ただれ切つた大人の世界から少しでも離すことによつて純真な子供心を傷つけまいと骨身を削つている。

ヘイガール（女を呼ぶ）ギンミー（物乞い）ゴツテン（悪口）などと悪い言葉はすぐ覚え。牛太郎、物乞い、女の子のマニキュア、〇〇仕事をのぞき見てよろこぶ児童など、浸潤する大人の世界の影響は大きく教員やPTA有識幹部必死の努力が無残に次ぎから次と崩されている。

彼は、遊興地としての山中地区に浸蝕されて小学校教育が非常に悪影響を受けているという問題について、村の上層部や教育者がパンパンに部屋貸ししていること、米兵が町をうろつく日曜日を登校日に変更していること、児童の言葉遣いなどが悪くなっていることを挙げながら論じている。こうした報道は当時の新聞で他にも頻繁になされており、例えば以下のような状況が伝えられている。

彼女らの一般家庭や青少年に与える影響についての調べによると部屋貸しなどから農家の現金収入が増加したため生活様式がハデになり、勤労意欲が低下した。また犯罪が多くなり、進駐軍物資の不法所持、同物資の窃盗、ワイセツ行為が激増している。青少年が多数ピヤ・ホールに出入りし、客と夜の女との仲介をして仲介料をとるため収入が増し、金銭の消費癖を身につけ、勤労意欲の減退は著しい。なお成人と同様な犯罪が発生しており、将来を心配されている。学生、生徒に与える影響は感受性が強い中、小学校生徒に与える影響は大きなものがある。出席状況は特に悪いとは認められないが、家庭での予習、復習は電蓄の音がやかましいため落ち着いて出来ず、また睡眠不足に陥り、学習意欲は極端に減っている。また早熟になり、遊戯中にもワイセツな言葉を平気でしゃべっている。かつては夜の女に対して不潔な悪い商売だという感じを抱いていたが最近では父兄と同じくらいやむような考えを持つようになった。（『朝日新聞山梨版』1951年9月7日）

こうしたパンパンによる悪影響が目目されるなかで、以下のようなさまざまな取り締まりが検討される社会問題となったのである。

去月十六日中野村々長、同村会議員、P・T・A役員、大月税務署長、吉田保健所長、風俗営業者など約四十名が参集し意見の交換を行った結果、ピヤ・ホールの内部を表通りから

見えないようにする、道路上でのみにくい行為を禁止する、学校から百以内での風俗営業を取締る、中、小学校生徒と夜の女との同宿を禁止するなどの事項を定めたほか、国警県本部防犯課では今後ワイセツ行為、児童福祉法違反、職業安定法違反、風俗営業違反、政令違反、麻薬取締法違反などあらゆる角度から取締りを強化するという。

その他文部省、厚生省などの係官の現地視察もすでに行われ、おのおのの立場から対策を研究しているが、まだ具体的措置をとるまでになっていない。また県青少年問題今日機会でもこの問題を重視し、目下その対策を研究中であり、その他婦人団体、県議会でも重大な社会問題として対策をねり、近く条例設置の機運もある。（『朝日新聞山梨版』1951年9月7日）

2. 地域住民の感情と外部からのまなざし

以上のように外部から問題視される山中地区の遊興地であったが、それに対して地域住民はどのように考えていたのであろうか。まずは、1952年6月25日付けの『山梨日日新聞』に掲載された「山中部落児童アンケート」を確認してみたい。これは1951年夏に山中小学校の5～6年生を対象に行つた調査結果であり、番号は回答が多い順番になっているとされている¹³⁾。

- ▷あなたは山中へ来ている兵隊をどう思いますか
 - ①立派な人だと思う ②子供をかわいがる人
 - ③親切な人と思う ④お酒をのむ人だと思う
 - ⑤おんなの人をかわいがる人だと思う
 - ⑥日本人をまもつてくれるよい人だと思う
 - ⑦女の人をおいかければかりいる
- ▷あなたはパンパンをみてどう思いますか
 - ①私もパンスケになりたいと思う
 - ②お金がもうかるからパンスケはよい
 - ③金をとるためだからよいことである
 - ④かわいそうな人である
 - ⑤人間であるが人間でない人である
 - ⑥山中から早くなくなるほうがよい
 - ⑦パンスケのやつているのは悪いことである
- ▷学校の子供がよくするにはどうしたらよいか
 - ①パンスケがいなくなればよい
 - ②パンスケのあとをつけない ③みんなで注意しあう
 - ④パンスケの真似をしないこと
- ▷どういところが悪くなりましたか
 - ①村がきたなくなった（紙くずやビール瓶のかげら）
 - ②パンスケのマネをしてつめを赤くぬる
 - ③パンスケの仕事をみるものがある
 - ④交通がごたごたしている ⑤女がおしゃれになる
 - ⑥村がさわがしくなつた

ここから、小学生たちは米兵やそれにとまなう遊興地の問題を概して指摘していたが、細かく見るとその意見は多様であり、好意的なものも散見されることが確認される。さらに、

山中地区の成人はより一層複雑な感情を抱いていたことがいくつかの資料から認められる。特にパンパンに対する住民感情については、以下のように好意的な傾向があったことが指摘されている。

住民も次第に免疫的となり、これ等婦女子の行動に対して余り関心を持たなくなり、米軍人の駐屯ある以上は特殊婦人の存在も亦やむなきものとし、これ等婦人の存在により地元婦女子の不安もなくなり、反面ある程度の経済上の利益を得ることによつて、地元住民と特殊婦人とは不即不離の関係を生じ、現在では内心一部には米軍人の入籠を歓迎するやの傾向すら見受けられる状況である。¹⁴⁾

私は部屋貸しをしている農民の数人と話してみたが、だれの話にも共通して三つの訴えがくりかえされた。

一、生活が苦しくなつてしかたなしに部屋を貸すようになったこと。二、貸してみると人情がうごいて追い出せなくなったこと。三、パンパンは村の婦人の貞操を守ってくれること。

……

パンパンの群れが部隊の後を追うように移動してきてからは、裾野からこうした恐怖が去った。そのためキャンプ周辺の村落では、彼女たちを一種の守護神のようにみているものも多いうだ。¹⁵⁾

こうした状況に対して、外部からのまなざしは非常に手厳しいものとなっていた。例えば先の『山梨日日新聞』による小学生へのアンケートの前文や、『山梨時事新聞』に掲載された神崎清のコメントは、現地の拝金主義を強く批判している。

外部の資本は極く僅かという事情をみても山中の場合、いかに底深いものを持っているかが判る。特殊婦人歓迎は村の発展……と誇号しかねない気配である。「女達の嬌声に村をまかせて一番被害を受けるのは子供達だ」という批判的な声もあるが、もとより脆弱なもので、時機到来の皮算用に没頭しているとしか見受けられない。……こうして山中部落は国際特許街化へバク進んでいるわけであるが、この事態に対して外部から打つ対策はなく、拱手傍観、成行きにまかしているのが実情だ。……「収入!」そのためには兵隊相手のパンパン宿も止むを得ない、風教上の影響など考える余裕はないというのが山中の表情……(『山梨日日新聞』1952年6月25日)

演習場への出入禁止から傭仕事や山仕事の出来ぬ経済的理由をあげているが、皮肉なことに間貸しで稼いでいるのはゆとりのある中流以上の家が大多数を占めており、モウケ仕事の欲求からと見る方が正しいようだ。

(『山梨時事新聞』1951年8月17日)

このように山中地区は、米軍基地周辺に居住して耕作地を奪われたり、さまざまな危険にさらされたりする状況に加え、パンパンの存在にしても、教育状況にしても、宿貸しにしても、現地の状況が外部から否定的に報道されるという事態になったのである。

その結果、山中地区の人々は、外部からのステレオタイプ化されたまなざしに対して反発するようになる。例えばある記事では、「取材中の記者らは、突如血相替えた壮漢の怒声を浴び、物陰へ呼び込まれた。『山中は風紀が悪いとか、山中は女でもうけているとか、お前たちは悪意の報道ばかりする』」と、部落青年団副団長の行動と発言を伝えている¹⁶⁾。また、なかでも象徴的なのが以下の現地報告であり、ここでは地元住民の新聞雑誌報道に対する不信および拒絶と、ジャーナリズムという外部からのまなざしによる地元住民の被害が的確に論じられている。

この村を歩いてみて受けた第一印象は、意外に、ひっそりと落ち着いているということであった。……不思議に思って、駐在の人にきいてみると、「どうも、昨年来の新聞雑誌の報道が、すこし誇大に過ぎているのではないですか。別に、大したことありませんよ。……この村は、もともと観光客に依存していた村なんですから、その観光客がGIに代わったというだけの話ですよ……」

……

山中小学校のY校長を訪ねてみても、だいたい、これと同意見であった。

「まあ、接収問題で困っている人々があるのは事実です。あの丘の向こうで、空陸一帯の実弾演習が始まると、ガラス窓が割れるような大きな音がして落ち着いて授業ができないのも事実です。しかし、パンパンの生活が、児童に悪影響を及ぼしているというようなことは、私の見るかぎりないと思います。子供は、そういうことには無関心ですよ」

下手なことを喋って、それを誇張・歪曲されては迷惑、というような用心深いしゃべり方なので、

「ずいぶん、いろんな人々が訪ねて来るでしょう?」

といってみると、急によみがえったような表情になって、憤然という。

「毎日のようで、応接にいとまがないくらいです。忙しくて自分の仕事ができないほどです。それに、真面目な雑誌の記事になるのならいいですが、エロ雑誌なんか、扇情的に扱うものですから、大いに迷惑してますよ。民主主義というのは、他人の生活をかれこれいわないことではないですか。まったくそっとしておいてもらいたいものですよ」

……

この人達は、駐留軍による直接間接の被害を受けたうえに、さらに、ジャーナリズムの誇張宣伝によって二重三重の迷惑を蒙っているらしいのだ。¹⁷⁾

IV. おわりに

本研究では、山梨県南都留郡中野村山中地区を事例として、キャンプ・マックネア周辺の遊興地の成立による地域社会への影響を、まなざしの問題に注目しながら検討した。特に、観光地から遊興地への山中地区の変容とそれに対する外部からのまなざしや、住民の遊興地に対するまなざしの多様性、そして外部からのステレオタイプ化されたまなざしに対する住民の反発について、地域社会の状況やアイデンティ

ティの問題に焦点をあてて考察した。

しかしながら、本稿ではその概要を検討したのみであり、山中地区への多様なまなごしを、富士山や観光地との関係も含め、今後より詳細に考察する必要がある。また山中湖周辺の観光地化の系譜やキャンプ・マックネア周辺をはじめとする他の遊興地の状況についても調査し、その関係性を検討することも重要である。以上の点を今後の課題とし、稿を閉じることにした。

【付記】

本稿の調査にあたり、平成19年度－平成22年度 科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）「都市空間における女性の商品化－米軍基地周辺遊興街の社会・歴史地理－」（代表・吉田容子）を利用した。

【参考文献】

- 1) 『編集復刻版 性暴力問題資料集成 第五巻』, 不二出版, 2004。
- 2) 吉田容子「米軍施設と周辺歓楽街をめぐる地域社会の対応—「奈良RRセンター」の場合—」, 地理科学65(4), 2010, 245-265頁。
- 3) 作地重知「炸音と嬌声のるつぼ—山梨県・山中湖基地—」（猪俣浩三・木村禰八郎編著『基地日本』和光社, 1953, 116-125頁。[所収『編集復刻版 性暴力問題資料集成 第五巻』, 不二出版, 2004。]）。
- 4) (1) 山梨県編『山梨県史 通史編5 近現代1』, 山梨県, 2005。
(2) 山梨県編『山梨県史 通史編6 近現代2』, 山梨県, 2006。(3) 山梨県南都留郡山中湖村役場編『山中湖村 長期総合計画』, 山梨県南都留郡山中湖村役場編, 1978。
- 5) 『毎日グラフ』1952年8月1日。
- 6) (1) 山梨県編『北富士演習場問題の経緯』, 山梨県, 1968。(2) 宮内寒弥「キャンプ・マックネア周辺」地上5月号, 1953, 90-97頁。
- 7) 山梨県編『山梨県史 資料編19 近現代6 教育・文化』, 山梨県, 2002, 629-652頁。
- 8) 戸田榮三「富士山麓における米軍演習場周辺の実態」, 山峡(6・7), 1953, 27-31頁。
- 9) 前掲8) 参照。
- 10) T・K生「ルポルタージュ 『中野村』の表情」, 山峡(4), 1954, 52-55頁。
- 11) 前掲5) 参照。
- 12) 神崎 清『決定版・神崎レポート—売春—』, 現代史出版会, 1974, 320-332頁。
- 13) 山梨県編『山梨県史 資料編15 近現代2 政治行政II』, 山梨県, 1999, 1010-1012頁。
- 14) 前掲8) 参照。
- 15) 西岡辰吉「ルポルタージュ 富士の裾野」, 婦人公論(10), 1952, 144-149頁。
- 16) 前掲5) 参照。
- 17) 宮内寒弥「現地報告 キャンプ・マックネア周辺」, 地上(5), 1953, 90-97頁。

受付日 2011年4月26日

受理日 2011年4月27日